

## 離島をめぐる本と新聞のこと

中央図書館事務部 レファレンス課 係長 谷 口 甲 二

チャンスがあれば日本の端っこの島々を隅々まで巡ってみたいと思う。そのような自分でもなかなか得体の知れない欲求に気づくときがある。辺境や境界、離島というキーワードをどこかで目にしてしまうとびくりと反応してしまう。それにしても今年の夏はなんと我が国領土の端っこの島々が世間の耳目を集めたことであったか。

海上保安庁の調査によると、日本には北海道、本州、四国、九州、沖縄本島はもちろんそれらに北方領土など合わせた、大小6,852もの島があるという。何をもちょうと定義するかはさまざま議論があるようであるが、現行で一つの島として数えるには、①周囲が100m以上のもの、②何らかの形で本土とつながっている島については、それが橋・防波堤のように細長い構造物でつながっている場合は島であるとして、それより広くつながって本土と一体化しているようなものは除外される。③埋立地も除外されるとある。これらの島の大半はおよそ人の住んでいない無人島であって、その中で有人の島は435ほどである。そしてその島ごとに異なる多様な生活様式や文化や産業が息づいている。

ぜひ行きたいと思いつつ、実際には片手で数えるばかりの手近なところしか訪ねることができてはいないけれど、その代わりに島を題材にした本を読んで遠く海の向こうまで出かけたつもりになる。池澤夏樹著の『南鳥島特別航路』は、そんな無聊をかこっては焦がれるような旅愁に焼かれる心を、ひとときは満たしてくれる胸のすくような紀行文の秀作であったりする。

「日本の最東端はどこかという質問にすぐに正確な答えを出せる人は少ないだろう。(中略) 東京からならば南東に1900キロの彼方、南鳥島。旧称をマーカス島と言って今でも気象関係の人たちにはとおりがいい。知らない人に説明するには、新聞の天気図で一番下にある記号の場所というのがいいだろう。周囲7.6キロほどの小さな島で、一番近い小笠原からでも1000キロ以上離れている。東京都小笠原支庁に属するが、行政的な意味での住民は居ない。では、無人島かという、まったく人が住んでいないわけではない。気象庁と自衛隊、それにアメリカの沿岸警備隊の人々が全部で50人ほど駐屯している。言うまでもなく全員が男性。この島をみたいと思った。」

そうだ、この本を手にとった読者もまた同じく見たいと思う。中部太平洋の絶海に浮かぶ孤島に民間人がおいそれとは立ち入ることなどできない。しかしこの特別な島に作家はちゃっかりと上陸しては珍しい見聞を自在な筆致でありやかに綴っていく。12の掌編で語られるこの旅の本の中では作家はマーカス以外にも対馬へと長駆して足を踏み入れ、さらに長崎の五島列島や沖縄県の八重山を訪れ、さらに国境までも越境しサハリンにまで赴いて、その土地土地での体験や目の当たりにしたことがらを興味深く分析的な筆致で記録していく。どうにかして自分もまた、これらの島々に足跡を残すことができないだろうかとしばし空想を巡らせてしまう。

2011年の11月にとっても地味だが味わい深いタブロイド紙が新しく創刊された。扱っている内容は離島での生活のさまざまについて。

その名も離島経済新聞社発行の「季刊リトケイ」(ritokei)。こぢんまりした所帯の編集部でDTPソフトを駆使しては、安上がりにして素朴な味わいの凝ったデザインの紙面作りに成功し、今のところ第3号までなんとか継続してやってきているようだ。大きな会社が広告主になって紙面に賑やかな宣伝をうつ様子もない。るるぶやじゃらんなどの旅行誌の華やかさや賑わいはさらになく年4回の季刊である。果たしてこのような新聞を購読して読もうなんて潜在的な読者はそんなにいるものだろうか、そのうち予告なく休刊になりはしまいかと勝手に心配してしまうぐらいの小紙なのである。

国境の島に住まう人々の生活の様子を写真とイラストを織り交ぜてわかりやすい言葉で伝える。島人に伝わる祭祀の意味や生活の知恵や島に残る事物の由来などを島の人の言葉で紹介する。かと思うと別の切り口で、離島が抱える現実的な困難さを時限立法の「離島振興法」を解説してみせる小特集にして小気味よく読ませてくれる。さらに島をテーマに扱った書籍のレビュー記事や、数々の島の音楽のCDを紹介するコラムなど、おしゃれな工夫もあって決して飽きさせることがない。土曜の午後などに、なにげなくこの紙面を手にしてほんやりと記事を追うだけでなんとなく幸福な気分になる。あれ？

……さて、この新聞が読者層に想定しているのは、ひょっとして他でもない自分のような人間ではないかという考えが頭をよぎる。かように超マイナーな新聞を手にして、こうして知ったかぶりに紹介してみせる事実こそそれを裏付けている。チャンスがあれば日本の端っこの島々を巡ってみたいと、そんな不埒な空想を巡らす人間は、この新しい試みの新聞を継続させるぐらいには日本に少なくないのかも知れない。さまざまな流通経路をくぐって届けられるべきものが正しい届け先に届くべくして届いているのだから、この先しばらくはこの新聞も安泰なのであろう。事実、

私は早く次号を読みたい。

週末にデジタル一眼カメラを手にして神戸港や大阪南港やら果ては舞鶴東港まで、大きな船舶や艦艇を撮影しに行くのが習い性になってしまった。ある離島での出来事として、港の沖合に大きな灰色の海上自衛隊の艦艇が停泊しているのを間近に見て心躍る思いがして以来のことだ。永く広島に住んでいたがそれが海上自衛隊呉基地所属の輸送艦であったことに後になって気がついた。船は本土と離島を結ぶ靱帯でありかけがえのない交通路だ。この岸からかの岸へこの身を渡してくれる器が船である。また思いがけない豊穡さを水平線の向こうからもたらしてくれるのも船である。輸送艦「しもきた」は昨年3.11の地震と津波が襲った被災地においては捜索救助活動とともに、被災者に対し暖かいお風呂を提供してみせることで尊い任務を果たして見せた。

大きな災害を間の当たりして、日本人の価値観が大きく揺らいでいる。本当に豊かに生きるとはどういうことなんだろうなあという問いかけの先に、離島での島人の生活が半分うらやましくも映る。なるほど編集者という人達は時代の気分というものに鋭敏に察知して、この新聞を創刊したんだなとコトリと腑に落ちて理解できた。



・日本の島：島宇宙が育む日本文化、再発見（別冊太陽），平凡社，2003. 152 p.

《本館所蔵 291.09 //N71》

・池澤夏樹. 南島島特別航路. 新潮文庫, 1991. p.163. 《本館所蔵 新潮文庫い 41 - 2》

・リトケイ：離島経済新聞 (<http://ritokei.com/>)